

第 18 号

2000年6月

社會經濟史學會中國四國部會

會 報

(発行)

会報編集委員会

岡山大学経済学部内
岡山市津島中3-1

地方部会の 可能性をさぐる

岩 橋 勝

近年、社会経済史の潮流が環境と経済、ジェンダー、疾病と飢饉など、かつて特殊と見られていた分野に傾きつつあるという。ここにはこれまで主流であった生産史観（生産関係や技術、それらを促進させるシステムや経済主体の形成史などを含む）はとうの昔に影をひそめ、ついで主流となった社会的分業関係に基づく商品・物資の動き、取引システムの変化などの史的追求ももはや時代の関心から遠ざかりつつある、という認識がある。

時代の潮流から外れた研究が無意味だというつもりはないが、すべての学問が現代と無関係ではあり得ない以上、経済史に要請されている現代的課題に目をそらすことはできない。求められているものは、もはやあくなき経済成長、企業発展、商人・地主の致富の歴史ではなく、それらの過程で見過ごされてきた地球環境、弱者、少数派、大衆、日常性、危機管理などがキーワードとなっている。これらの潮流は海外、とりわけ欧米の学界でまずうねりが起こり、日本の一部の外国史研究者が呼応してそれらの課題に従事し、かれらの研究成果や外国人研究者の来日講演などを通してようやくわが国に根づくようだ。本学会関東部会では年間開催数（5～7回）の約半分は来日学者講演に充てられるほどで、い

かに彼の地の人々が海外の潮流に注目しているかを示す。

問題は地方部会の在り方である。いかに情報化が進んだといっても人の交流には多くの制約があり、情報は受け身となる。海や山で9県が分断されている本部会は日常的な相互交流が困難であるのみならず、多くの課題追求の際に機会享受の点で不利な立場にあり、「中央」にいる人々の後塵を拝する位置にあるように見える。しかし、たしかにそうだろうか。

経済史の潮流がいかに変わろうと、あらたに提起された課題は常に一定の仮説なりモデルを伴っており、それらはより多くの事例によって検証されねばならない。たとえば冒頭に挙げた環境、ジェンダー、疾病など、いずれの問題も「地域」により現れ方は一様ではない。4年前の香川大での部会大会で設けられた「歴史人口学」パネルは中国・四国地域の事例を析出しようとするものであったし、昨年の岡山大大会でも疾病史にかんする貴重な個別報告があった。逆に、本部会地域の特性を生かしたテーマ設定も可能であって、2年前の高知大での「自由民権」パネルはご当地ならではの顔ぶれであったし、本年度島根での大会では県内歴史的遺産をテーマとするパネルが計画されていると拝聴する。「地方部会」とはいえ、会員のなかには「中央」のみならず海外研究者に伍して「潮流」に関わるテーマを追求されている方も少なからず、一方、永年の地域史研究の蓄積で具体例に詳しい多くの研究者双方の交流によって編み出

される、圏外研究者の参会をも呼び起こすような魅力的な部会大会の可能性は、決して夢ではないと考える。

5年にわたり本部会の活性化に甚大な貢献を果たされた神立春樹教授が、岡山大学退官にともないこのほど代表理事を退任された。この間の会報発行、名簿充実、部会財政の確立など、数々のご労苦に対し、また支えられた事務局担当者に対しても併せてこの機会に深甚なる感謝の意を表させていただくものである。

教授は昨秋の役員会においてさらなる活性化を期し、部会役員 of 適度な交代を促す任期制導入を提言された。しかし、各県で事情は一樣ならず、その精神をできるだけ引き継ぐことで決着した。また、部会運営、とりわけ年次大会に向けて様々なアイデアが導入できるよう、できるだけ各県に1名以上の幹事を求めていくこととなった。もとより、他地区部会のように、しばしば会合を持つことは不可能であり、ようやく浸透してきた情報機器が有効性を発揮することであろう。

1. 1999年度総会記録

1999年度総会は、11月6日(土)、大会第1日目の報告ののち、事務局員の在間宣久氏の司会で、5時40分から開かれました。代表理事の神立春樹氏の挨拶のあと、次のような報告・議案が提出され、了承されました。

1999年度事務報告 1999.11.6

1. 活動報告

- ・1999.2.23 : 会報第16号の発行・送付
- ・1998.8.3 : 大会開催予告、発表申込の受付など連絡

8.29 : 理事会開催通知

9.4 : 理事会開催(於、岡山大学経済学部410号室)

参加者: 道重哲男(広島)、松尾寿(島根)、神立春樹・在間宣久・森元辰昭(以上岡山)、及川順(山口)、岩橋勝(愛媛)

議題: 1. 報告者・報告論題の決定、司会者の決定

2. 2001年度大会開催地について - 徳島大学にお願いする。

3. 役員についての申し合わせ(別紙)

4. 代表理事の交代について(別紙)

9.12 : 報告者・報告論題決定通知(報告者宛)

9.21 : 理事にたいし、理事会報告を通知する。

以後は、開催校(岡山大学)による大会諸準備に入った。

2. 会員の状況

1996年度会員 152名(1996.10.31現在)

1997年度会員 163名(1997.10.31現在)

1998年度会員 175名(1998.11.3現在、但し不明者を含む)

1999年度会員 172名(1999.11.6現在)

増減内訳

: <退会者>

佐川静平(愛媛) 大内優徳(愛媛-死亡)

大津寄勝典(兵庫)、武知忠義(徳島)、

井内昌治(徳島-死亡)、奥和義(山口)

以上6名

: 新規加入

木村健二(下関市立大学経済学部)、

原直行(香川大学経済学部)、

上広尚子(岡山大学大学院生) 以上3名

<別紙> 議題3 役員についての申し合わせ

I. 理事・代表理事の選出について

(1) 選出方法

①各県は各1名（但し会員の多い県は2名－現在は広島県・岡山県）の理事候補者を選び、理事会は、代表理事候補者を選ぶ。

②総会は、この候補者案にもとづき、理事・代表理事を選出する。

(2) 任期：理事・代表理事の任期は2年とする。再任については、理事は各県適宜とし、代表理事は理事会で決定する。

II. 監事

理事会は候補者を推薦し、総会において選出する。任期は2年とし再任を妨げない。

III. 幹事

①各県は幹事を理事会に推薦できる。理事会は、それにもとづき幹事を委嘱する。

②幹事は55歳以下の者とする。

IV. 事務局（事務局長・事務局員）

①事務局長は理事会が候補者を推薦し、総会で決定する。

②事務局員は事務局長が候補者を推薦し、理事会において委嘱する。

<別紙>第4議題 代表理事の交代について

I. 現代表理事の退任と新代表理事の選出

神立春樹氏は岡山大学定年退職により代表理事を辞任し、後任に岩橋 勝氏（松山大学）を選任する。

II. 理事の交代

広島より広島選出理事の交替についての提案があり、加藤房雄氏に替わり富岡庄一氏を推薦する。

付 「学会名簿」につきましては、大会終

了後の12月頃に発行する予定である。

以上

1999年度会計報告（1998.11.9～1999.11.5）

2000年度役員一覧

（下線部は新役員）

代表理事 岩橋 勝

理 事 松尾 寿（島根）、
下野克己・森元辰昭（岡山）
道重哲男・富岡庄一（広島）

及川 順（山口）、

伊丹正博（香川）、

三好昭一郎（徳島）

平田桂一（愛媛）、

田村安興（高知）、

（鳥取は空白）

監 事 辻岡正巳・太田健一

幹 事 井上 洋、千田武志、安蘇幹夫

顧問 内藤正中、比嘉清松、奥田秋夫、

渡辺則文、高橋 衛、小川園治

神立春樹

事務局 森元辰昭（事務局長）、在間宣久

社会経済史学会理事 岩橋 勝（松山大学）、

松尾展成（岡山大学）

事務局 〒700-0082 岡山市津島中3丁目1

番地 岡山大学経済学部

電 話 086-252-1111（代表）

内線7535

直 通 086-251-7535

FAX. 086-251-7571

（経済学部資料室に設置）

郵便振替口座番号 01290-4-12846

（加入者：社会経済史学会中国四国部会）

大会で了承された1999年度会計報告は以下の通りです。

1999年度会計報告 (1998.11.9~1999.11.5)

収入の部			支出の部	
前年度繰越金		372,181	封筒・切手代、用紙代	54,635
会費徴収 (11/5現在)		131,500	(発送事務アルバイト10,000)	
92年度 1口	1,000		ファイル代	4,468
93年度 1口	1,000		大会補助費 (11/2)	30,000
94年度 1口	1,000		理事会弁当代 (11/2)	15,000
95年度 1口	1,000			
96年度 2口	2,000			
97年度 9口	9,000			
98年度 30口	30,000		小 計	104,103
99年度 85口	84,500			
2000年度 1口	1,000		次年度繰越金	399,578
2001年度 1口	1,000			
合 計 (11/54現在)		503,681	合 計 (11/4現在)	503,681

2. 1999年度

大会報告

1999年度大会は11月6(土)、7日(日)の両日、岡山大学経済学部を会場に開かれました。最初に、高知大学人文学部長の渡辺輝道先生から歓迎の挨拶をいただき、続いて以下の報告および討論が行われました。

〔研究報告〕

《第1日目》11月6日

1. 軽便鉄道の地域的展開－岡山県井原笠岡軽便鉄道の場合－

岡山近代史研究会 上田賢一
司会 岩橋 勝

2. 戦前期における産業構成の府県別動向

岡山大学大学院 大川篤志
司会 在間宣久

3. 戦前期岡山県におけるトラホームについて－『岡山県統計書』にもとづく検討－

岡山大学 河内信子
司会 末広菜穂子

4. 明治前期の山口県における三井銀行の営業活動

早稲高校 島中茂朗
司会 平田桂一

5. 1940年代後半における中国東北の戦後情勢－ソ連軍の進駐と国共内線の掃討－

岡山大学 松本俊郎
司会 川合 悟

6. 日本高等教育制度確立過程における国家と高等教育機関

岡山大学 神立春樹
司会 高橋 衛

総 会 (上記を参照)

懇 親 会 (経済学部 1階教官控室)

《大会2日目》11月7日

7. わが国近代漁業の地域的展開

伊予史談会 熊谷正文
司会 下野克巳

8. アメリカ第6軍第10軍団の進駐と展

開 広島国際大学 千田武志
司会 道重哲男

9. 近代山口の地域編成と朝鮮

下関市立大学 木村健二
司会 森元辰昭

10. アウグスト強健侯と肥前磁器—18世紀

日本=ザクセン交流史の一側面—
岡山大学 松尾展成
司会 及川 順

2000年度大会予告

2000年度の大会は、島根で開かれます。

日時 11月11日(土)・12日(日)

会場・時間などは未定です。昨年までは11月最初の土・日でしたが、当番校の都合で、上記のようになりました。ご了承ください。

つきましては、発表者を募集しますので、例年のとおり、振込用紙に発表題目をご記入のうえ、事務局までご連絡ください。

・1999年度大会、ディスカッション

<以下は、事務局の森元のメモをもとにまとめたものです。中断やメモ不足など不十分ですが、報告要旨などをもとにご検討ください。>

<上田氏遅刻のため、第2報告から始めた>

1. 第2報告(大川篤志報告)に関して

<黒川勝利>表2と表4に関し、1人当たりの生産量を算出する必要があるのではないかと。例えばアメリカでは土地所有が拡大することに

よって1人当たり生産量も増加する。

<大川>1人あたりで算出しても工業生産額の府県別シェアに変化がないから算出しなかった。

<黒川>いわゆる「裏日本」の成立に関して禁欲的な報告になっているが、「裏日本」化現象の原因またはなぜのがれることができたのかについて、積極的な報告が欲しい。

<岩橋 勝>産業構成のうち「製造業」に注目すると「裏日本」または「山陰」で製造業がうまくいかず、農業のウエイトが高いが、第3次産業部門のウエイトはどうか。例えば、出稼ぎや船舶の所有状況などで検討できないか。

<大川>第3次産業のデータでは、営業税のデータが使えるが分析に膨大な時間がかかる。従業者のデータも扱いつらい。1920年の第1回国勢調査もあるが、利用に便利ないデータがない。

<太田健一>タタラが衰退していくが、タタラ稼ぎに従事した人たちがその後の製糸業者にかわっていくか。

<大川>人的に検討できていないが、タタラ衰退の地域に郡是や片倉などの県外製糸資本が進出する。県の勸業予算を1人当たりでみると鳥取県は1番高い。

<前田昌義>製糸業は国策産業であったから勸業予算が多いと言える。タタラとの関係でいうと、必ずしも連続していないのではと思われる。例えば、山陽製糸の浮田佐平はタタラ業者ではない。

2. 第1報告(上田賢一)に関して

<在間宣久>井笠鉄道の第一次敷設運動が報告されたが、第二次敷設運動があったのか。また、敷設運動と福山との関係はあったか。

<前田>レジュメ表3の年代はいつか。

<上田>明治38年の日露戦争期で、移入・移出とも増加しているが、移入超過である。

3. 第3報告（河内信子）に関して

＜日南田静真＞分析に敬意を表する。日清・日露戦争を契機に和気郡で耐火煉瓦生産が盛んになったが、全国で耐火煉瓦生産がどのように分布していたか。原料や運搬の問題が関係すると思われるが、八幡製鉄所に近いところに原料の珪石はなかったのか。

＜黒川勝利＞これだけのデータを作成しているのであるから、もっとトラホームの蔓延に関して多くのことがいえるのではないか。もったいない感がする。全国でいわれている戦争からの帰還兵が広めたということだけではなく、岡山の事例からほかの原因が考えられるのではないか。

＜吉崎一弘＞「珪酸を含む鉱石の粉塵の眼への慢性的刺激によって炎症を起こしやすい状況下にあった」と報告されたが、珪酸や珪石はほとんどの鉱石に含まれること、「水質」の問題が指摘されているが、水道が早くからひかれた地域であること、女子の罹患率が低いことなどを考慮すべきである。

＜太田健一＞発表に感銘を受けたと前置きし、「小学校トラホーム」と「工場トラホーム」の推移の関連、大正10年～昭和4年の時期の済世顧問制度との関連で、トラホームに注目していないかどうか。

＜河内＞検診医に関して、データの的に問題がある。大正11年の工場トラホームについて『片上町史』ではあまり書かれていないが、眼科専門医が入っていると思われる。

4. 第4報告（畠中茂朗）に関して

＜台風で家屋浸水（流出）、資料を失ったので、残った資料で発表することになった＞

＜日南田＞懇親会で話すべきか、「山県有朋公伝」の記述は誤りということか。

＜畠中＞そうだ。

＜日南田＞7ページの資料9「貸付方12万円」の内訳がわからないか。

＜畠中＞下関の間屋・商人に貸し付けたと思

われる。

＜及川 順＞下関は三井が店を出すほどに重みがあったが、「貸付金」が多いのは北海道の北前線との関係が深い。その他大陸との関係はあったか。山口県は全国で見ても人口流出県である。

＜畠中＞この時期にはなかったが、今後の研究テーマとしたい。

5. 第5報告（松本俊郎）スライドを使用しながらの報告）に関して

＜村山 聡＞報告のとおり事実を追うだけでも大変であるが、「今までの研究史ではバランスが取れてない」と報告されたが、歴史分析でもバランスを考えたときアメリカと中国報告ではレベルが違うとおもうので、バランスをどうとるのか。

＜松本＞中国側の史料の質が問われるが、バランスをとるのは難しい。戦局の事実は出来るが、何がバランスがとれるか、今は言えない。アメリカでも2つに分かれる。国務省では、失敗したのは蒋介石がバカだったからとするが、他の史料では国務省の失敗をあげつらう。

＜吉崎＞報告に感銘を受けた。自分はこの時期に遼陽にいた。火薬2000tを管理していたが、ソ連が占領し没収した。国民党が撤退した後共産党が入り、ソ連軍が撤退したことがわかった。自分は大連に連れて行かれたが、ソ連が撤退する時、大連の旋盤などの機械は基礎のコンクリートを含め全て持っていった。

6. 第6報告（神立春樹）に関して

＜千田武志＞県立医学校の官立移管に関して、岡山は官立、広島は廃止されたが、西洋医でないと認めない方針で各県に医学校が出来るが、明治20年に質を重視する方向に転換したと考えるとよいか。

＜神立＞その側面は確かにある。潰れたところは全て悪いかというと、そうとも言えない。例えば福岡県立医学校は廃止されるが、九州

帝国大学設置とともに医学部となった。

＜千田＞ 第3高等学校は大阪においてもよかったが、京都にいった。大阪を学術都市と考えていなかったのか。

＜神立＞岡山の場合、県知事が地元負担金5万円を否決したが、4万5000円を県が負担し500円を応募して実現した。

＜千田＞なぜ、岡山は第3高等学校医学部となったのか。

＜司会：高橋 衛＞旧制第3高等学校は大阪に設置しようとしたが、大阪が返上し京都に設置した。イギリスのパブリックスクールをまねたものである。

＜神立＞高等中学校が動揺していたというよりも、国の高等中学校政策が動揺していたと考えられる。

＜及川＞現在の大学で国立大学の独立行政法人化が提起されているが、これには背景として世界的な変化が考えられるが、旧制高等学校に関しては、学科制や講座制が敷かれた明治30年に高等学校も確立したと言えるのではないか。

＜神立＞第3高等学校は予科を廃止するが、これは事実上の大学である。

＜司会＞大正7年も画期ではないか。

＜神立＞その通りである。

＜吉崎＞岡山の医学校はどうなったか。

＜神立＞5つ残った。

＜日南田＞5つ残ったのは優秀であったからか、政治的背景はあったか。

ここで、代表理事の交替につき、新代表理事の岩橋勝氏の就任挨拶があった。

《大会2日目》

7. 第7報告（熊谷正文）に関して

＜道重＞漁獲高に関して、水揚げした場合の水揚げで計算したのか。

＜熊谷＞属人統計となっており、岡山県人が他地域で獲った場合でも岡山県の漁獲高に入

っている。

＜道重＞なぜ属人主義といえるのか。「植民地」となった以後の朝鮮半島では、現地で水揚げしたが、国内に含めた。山口・島根・福岡・長崎・愛媛などは朝鮮との関係で注意が必要。さらに、沿岸と沖合いの区別はどうか。＜熊谷＞船もトン数で区別し、5トンが区切りである。

＜道重＞対馬を中心とした地域は5トン以下で獲る。漁獲は釜山に持って行って売買したりするので注意が必要。

＜岩橋＞第2パラグラフで、近世から続く技術的な発展、近代化につながる近世に培われた技術とあるが、「技術的な発展」というのは表現が悪い。近世期に培われた漁業技術とすべきで、1910年代以前は近世技術の発展期ではないか。

＜熊谷＞1910年代以前は、技術的に変わっていないので、その通りである。

＜松本＞史料3,4に関して。推計上の工夫した内容とは何か。

＜熊谷＞漁船を把握する場合、隻数はトン数に変換して表示する必要があった。トン数で考えた場合、1932,33年で、動力化率が50%に達したかとが判明した。

8. 第8報告（千田武志）に関して

＜黒川＞師団というのは、army（軍）、corp（軍団）のいずれか。アメリカ全体の軍の規模はどのくらいか。

＜千田＞規模全体はわからない。第6軍には陸軍だけでなく海軍や海兵隊も入っている。

＜司会—道重＞日本の場合、師団は1~3等師団まであり、軍→師団→旅団→連隊の組織で、昭和20年に師団の下に大隊を設けた。戦闘部隊で10000人前後の規模。第5師団は25000人規模であった。

＜黒川＞報告では、軍の訳出に日本の師団のイメージがあるのではないか。

＜道重＞日本の軍隊制度も、実はきわめて曖昧

味である。

<岩橋>素朴な質問であるが、アメリカの資料によって修正するとの報告があったが、日本の行政などの記録はないのか。新聞などの記録はプレスコードがあったので載せないが、行政の記録はあってもいいのではないか。

<千田>日本軍は昭和20年11月30日までであったから記録があったが、アメリカが持って帰った。占領軍には日本軍が対応した。

<道重>占領軍が資料を持って帰ったが、日本では焼きまくった。資料についての命令はどうなっていたか。

<千田>占領軍関係の資料は捨てている。

9. 第9報告（木村健二）に関して

<古川昭>（短期間での研究の成果に敬意を表しつつ）矛盾解消のため山口県人が朝鮮に出かけたことに関し、山陽側と裏日本の沿岸での海外出稼ぎの違いについて、また山口県人は目が外に向いて進取の気運があること、朝鮮半島に近いこと、渡来人の血があることなどが考えられるがどうか。

<木村>日本海側では阿武郡が多い、萩町から朝鮮に出かけた。瀬戸内側は海運業が発達しており、これとの関連で見ることがある。山口と朝鮮の関係は、幕末段階以来の交易で、明治以降促進された。長崎との相違がそこにある。

<及川>移民問題を進取の気運で考えるよりも、その背景となっている地主（豪農）-小作関係から考えられる。小作人の上昇への可能性制限から海外へ進出したのではないか。

<木村>階層別の分析が必要であるが、土地所有関係の資料が今のところ見当たらない。小作地率の変化から追及していくことが可能。

収入が多いから海外に行くといえるが、朝鮮移民の場合、国内各地への移動との関連で見ることがあり、移民だけ地主-小作関係でみてはいけない。

<及川>殖産会社をつくる人々は豪農・豪商

であったが、どんな階層か。

<神立>地図があればもっと理解が深まった。広島はハワイ移民が多いが、瀬戸内側からの朝鮮移民は広島以西で多かったと考えられる。

<黒川>中間層の動向が重要と思われるが、長子相続制のなかで、家系的中間層も考えるべきではないか。

10. 第10報告（松尾展成）に関して

<神立>アウグスト強健侯の「強健侯」はわかりにくいので、ネーミングを変えるべきではないか。

<松尾>「the Strong」の訳で「強健侯」となる。

<岩橋>図5.6 年代の決定はどのようにして可能か。

<松尾>マイセンの年代は記録がある。

<司会-及川>日本の研究者にあまり知られていないと思うが、17~18世紀のザクセンはどういう特徴をもった時代か。

<松尾>アウグスト強健侯の時代からザクセン領邦絶対主義が始まる。1830年につぶれる。ドイツ全体では、ザクセンは勢力拡大を目指し、アウグスト強健侯の時ポーランド王を兼ねる。しかしプロシヤと対立し、息子の時代にプロシヤの圧迫でやられてしまう。マイセン陶磁器製作所も潰れ、バルリン製作所へ移る。

<午後1:00終了>



編集後記

とうとう年2回発行が崩れてしまいました。誠に申し訳なく、また情けなく思います。

1999年度大会報告、2000年度の会費徴収・大会案内もすべて一度に集中する結果になりました。2000年度は島根での大会となります。20世紀最後の大会が実りある大会になるよう、一層のご協力をお願いして、お詫びの言葉とします。

<森元辰昭 記>



1999年11月6日懇親会で（岡山大学）

< 渡邊広安氏撮影 >

資料 年度別大会開催地・報告件数など

1999. 11. 6

年度	開催期日	大会開催地	報告数
2001年度		徳島県	
2000年度		島根県	
1999年度		岡山県	10報告
1998年度	1998年11月7・8日	高知県	11報告
1997年度	1997年11月1・2日	広島県 (広島大学)	11報告
1996年度	1996年11月2・3日	香川県 (香川大学)	14報告
1995年度	1995年11月4・5日	山口県 (山口大学)	10報告
1994年度	1994年11月5・6日	岡山県 (岡山大学)	10報告
1993年度	1993年11月6・7日	愛媛県 (松山大学)	9報告
1992年度	1992年11月7・8日	広島県 (広島大学)	12報告
1991年度	1991年11月9・10日	島根県 (島根大学)	7報告
1990年度	1990年11月17・18日	徳島県 (鳴門教育大学)	3報告 : 他学会共催
1989年度	1989年10月14・15日	鳥取県 (鳥取県立博物館)	6報告
1988年度	1988年11月26・27日	広島県 (広島経済大学)	8報告
1987年度	1987年10月28・29日	高知県 (高知大学)	6報告
1986年度	1986年12月6・7日	岡山県 (岡山大学)	9報告
1985年度	1985年11月30、12月1日	香川県 (香川大学)	7報告
1984年度	1984年10月13・14日	山口県 (山口大学)	8報告
1983年度	1983年11月19・20日	広島県 (広島大学)	9報告
1982年度	1982年10月2・3日	愛媛県 (松山商科大学)	11報告
1981年度	1981年10月4日	島根県 (島根大学)	8報告
1980年度	1980年11月23日	鳥取県 (鳥取県立博物館)	11報告
1979年度	1980年1月20日	徳島県 (徳島大学)	8報告
1978年度	1978年10月10日	広島県 (広島経済大学)	10報告
1977年度	1978年1月22日	高知県 (高知大学)	10報告
1976年度	1977年1月23日	岡山県 (岡山大学)	10報告
1975年度	1976年1月18・19日	香川県 (香川大学)	18報告
1974年度	1974年9月29日	山口県 (山口大学)	9報告
1973年度	1974年1月20日	愛媛県 (松山商科大学)	11報告
1972年度	1973年1月28日	広島県 (広島大学)	3報告